全電源喪失の記憶

証言　福島第1原発

■第2章「1号機爆発」

14

さながら野戦病院に

作業員であふれる医療室

3月12日午後3時36分、福島第1原発免震重要棟2階の緊急時対策本部では1度だけ大きな揺れがあった。「ん？　何だ、これ余震か？」。対策本部の円卓に座る所長の吉田昌郎(56)は首をかしげた。余震にしては何か変だ。だが窓がないため、外で何かあってもすぐには分からない。

発電班副班長の野口秀一(54)は何かとんでもないことが起きたに違いないと直感し、隣の事務本館に通じる渡り廊下へ走った。渡り廊下からは各号機が見える。

目に映った光景は信じ難いものだった。急いで対策本部まで戻ると、絶叫した。

「1号機のリアクター(原子炉)の5階が吹っ飛んでます。柱だけになってます！」

1号機の爆発後、免震棟1階はパニック状態となっていた。第1原発から避難しようという作業員が出入り口の自動ドアに殺到していた。二重になっている自動ドアは地震で故障していたため、放射線管理を担当する保安班員が手動で開け閉めをしていた。

「誰も出るな」「落ち着け」「中にいる方が安全なんだ」

逃げようとする作業員を保安班員が必死に食い止めていた。逆に、自動ドアの外には早く免震棟に入りたい作業員たちが列をなしていた。保安班員は免震棟に入る作業員がどの程度汚染されているか一人一人検査しなければならない。

1階の救急医療室では医療班長の福澤淳(43)らが体調不良を訴える作業員の対応に追われていた。医療室は広さが約30平方㍍。産業医用の机に、ベッドが二つあり、応急手当て程度ならできる医療器具や薬品を備えていた。

だが、産業医を務める男性医師は11日夜に帰宅して以降、不在だった。いわき市から通ってきていた医師は震災発生後、生まれたばかりの子どもを含め家族の安否が確認できずにいた。福澤が見かねて、帰宅を勧めたのだった。

爆発でけがをした人、ひどい耳鳴りを訴える人、恐怖で震えが止まらない人。

医療室の床は座り込んだ作業員であっという間にいっぱいになり、入りきれない作業員たちが廊下にあふれた。医師のいない医療室では投薬や点滴などの本格的な医療行為ができない。陸上自衛隊員が廊下でけが人の止血など応急手当てをしていた。

混乱した医療室で大きな存在感を示したのは医療班の女性社員だ。

「大変だったね」「よく頑張ったね」「大丈夫ですよ」

優しく背中をさすりながら、なぐさめたり励ましたりした。

福澤が振り返る。「医療室はさながら野戦病院のようでしたけど、彼女たちの存在が現場を救っていました」

(敬称略。年齢、肩書は当時。共同通信　前田有貴子)

福島第1原発の免震重要棟出入り口にある管理スペース＝2011年3月(東京電力提供)